

美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

特集  
里山と暮らす  
庄内憧憬  
黒田杏子  
俳人

9

2014 September/October  
TAKE FREE  
NO.25

Cradle

美しくなつかしい、日本をのせて。  
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2014 September/October  
平成26年9月1日発行(隔月奇数月発行)第5巻1号(通巻29号)

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-16 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64)0888  
制作／Cradle編集部 山形県酒田市茶田2-59-3 [コア・コミュニケーションズ] 電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



酒田市／鶴間池と鳥海山

水澄んで 秋の嶺 空の青 色濃く映す

 庄内銀行

白き山、月山のあの美しくも神々しい山容が両の眼に広がり、そしてこの地に縁あるすてきな女性たちの顔が浮かぶ。心の友と語り合いたい、雪の降る町鶴岡、心のふるさと庄内。

## とりわけ雪の降る

### 町のよろしさ

#### 黒田杏子

庄内とつぶやけば心に灯がともる。白き山、月山のあの美しくも神々しい山容が両の眼にひろがってくる。そして、この地にご縁のあるすてきな女性たちの顔が次々に浮かんでくる。あこがれの「黒川能」に誘ってくださったのは馬場あき子先生。その何度目かの黒川能への旅で出会ったのが竹野恵子さんだった。NHK鶴岡放送局から東京の放送センター勤務となったこの人とは長い交流が続いている。この人は口を開けば「鶴岡」。その自慢の町に、また二人と居ない女性が居ますよ、と紹介されたのが酒井天美さん。天美さんは東京から旧庄内藩主酒井家に嫁がれた方。天美さんのご母堂、小泉泰子さんをよく存じ上げていたのでびっくり。小泉さんは女性経営者で俳人。片や博報堂で『広告』の編集長と俳人という二足のわらじを履いて懸命に走り出していた私を、終生励ましつ

づけてくださった恩人だ。そして『月山』の作家、森敦先生の養女ですぐれた作家である森富子さん。出版社に勤務されていた富子さんと私はフルタイムの仕事を持った女性として現在もずっと共感できる友人である。

当屋と呼ばれる民家で演じられる黒川能。座敷を埋める人々。その人波の上を手送りで立派なお弁当が私に届く。観客の中には酒井家のご一家も座っておられ、小泉泰子・酒井天美母娘の華のような微笑が私に向けられている。このとき、私は竹野さんの「鶴岡ほどすばらしい城下町は二つとありません」という日頃の言葉を実感し、涙ぐんでいた。近年は鶴岡市主催の「雷サミット」なるタイトルの珍しいシンポジウムにも〈雷俳句〉の選者としてお招きいただいている。一月の

初めに開催されているので、松の内に  
出羽三山神社にお詣りできるように  
なった。若い時には夫と、芭蕉と曾良  
の足跡を辿り、三山縦走も果たし、月  
山の山頂小屋にも泊まっている。これ  
はあくまで夏季のことである。松の内  
は宮司様以下神職の皆さまは新年勧進  
でお出かけでお留守。しかしあらたま  
の雪に包まれた三神合祭殿と参詣道ほ  
ど荘厳なものはない。タクシーでも市  
内から行ける文字どおりの雪浄土。羽  
黒山斎館では芭蕉膳もいただける。ど  
なたもおっしゃるように、庄内は食の  
宝庫。海の幸山の幸に加えて、庄内だ  
けで育成される野菜の種類が数えきれ  
ない。名店「アル・ケッチャーノ」は  
言うに及ばず、郷土菓子、風土菓子、  
昔菓子、駄菓子もたくさんある。眼前  
に月山を望む史跡「松ヶ岡」で、心友  
の天美さんや恵子さんと、久々にお  
しゃべりをまた愉しみたい。

雪の降る町つるをかの月の道 杏子



雪の出羽三山神社三神合祭殿(羽黒山)

くろだ・ももこ／俳人、エッセイスト。1938年、東京生まれ。俳誌『藍生（あおい）』主宰。同人誌『伴』同人。日経俳壇選者。夏草賞、現代俳句女流賞、俳人協会賞、桂信子賞、蛇笏賞などを受賞。句集、著書多数。

特集 | Special Edition

# 里山と暮らす

いつも眺めていた田んぼや森の中が  
さまざまな色や形であふれていた幼き思い出。  
身の回りのあらゆる息吹を感じて  
暮らしていくことを教えてくれた「里山」は、  
美しい自然と、私たちがいる、心の原風景です。

協力 | 環境教育工房 LINX

写真提供 | 田口比呂貴、今野楊子、保科直子、池田聡子、

やまもとわいわい工房、三瀬保育園

「LINX」写真 | Madoka SATO (環境教育工房 LINX)





ブナ林に代表される落葉広葉樹の広がる東日本は、古来、森を活用してきた「ブナ帯文化」が基層にあります。多様な生物が生息する森、そこに人の息吹がある場所を「里山」といい、自然と人とが共に営みを続けてきました。

## 恵みを楽しみ、生かす

## 里山という生活の場

**自然を観察し、学び、糧とする  
四季を感じる里山の暮らし**

四季の変化に富むブナの森には、キノコや山菜、木材をはじめ多くの産物があり、私たちはその恵みを大いに利用してきました。「里山」とはそうした人々の営み作り出した自然環境のこと。市街地と原生的な森林との中間にあたる里山は、産業や景観、伝統や生活文化の象徴です。じつに国土の4割を占めるその里山が今、経済や社会の変化によって人の手から放置され、姿を消そうとしています。昔と今、そして未来の里山について、森林の生態や環境に詳しい山形大学農学部林田光祐先生と一緒に考えてみました。

「かつては里山が生活の一部とたんですね。効率やスピードを求めた結果、人々の生活は一変し、身近な自然は淘汰の対象となりました。その里山の自然が今、危機にさらされていることがある調査で明らかになっています。「昔、野山で見ていた動植物が姿を消していることは、当時を知っている人なら気づいていると思います。日本の絶滅のおそれのある野生生物を調査した『レッドデータブック』によると、その動植物の多くが里山に生息しているという結果が出ています」。このことは、里

### かけがえのない多様な生物 その生態系から得る恵みを 里山の保全、再生から

山の豊かな自然環境を支えてきた「生態系」と「生物多様性」が乱れていることにほかならず、食料や燃料の供給、気候や水質の安定、これらすべての基盤である酸素の生成や土壌形成といった仕組みが損なわれることを意味しています。この現状を危惧して今、里山の価値が改めて見直されるようになりました。

平成22年、生物多様性条約第10回締約国会議COP10で、日本は「SATOYAMAイニシアティブ

山形大学農学部教授  
林田光祐さん

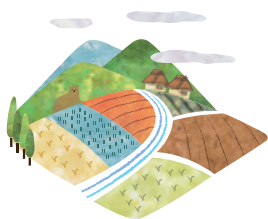
生態、環境、森林科学を専門に、庄内の森林の構造や動態、植物と動物の相互関係を調査。生物多様性の保全技術や、森林の育成方法創出の研究を行っている。



て成り立っていたんです。でも今は何でも簡単に手に入るようになって、わざわざ山に採りに行くのか、わざわざ町に買いに行くのかと考えた時、この『わざわざ』の距離感、価値感が変わってしまった

「ブ」を提案しています。これは、失われつつある里山のような二次的な自然を、持続可能な形で保全・利用し、行動していこうというものです。「里山の自然共生システムを世界に広げていこうという動きですね。庄内の自然環境で暮らす人たちにとって里山は、生活そのものの話です。生態系からの恵みを楽しみ、ここでしか味わえない生活があります。里山にはまだ埋もれている資源もきっとあるはず。それを価値あるものとして見出すのは、私たちがどう利用するか。今の生活にあった里山のシステムを、地域でつくっていくことが大切ですね。今だって、チェーンソーを持って山に入りましょうと声をかけたら集まってくる人がたくさんいます。庄内には里山を生かせる人たちがたくさんいるんですよ。」

※集落をとりまく二次林と、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念としての里山面積（二次林約800万ha、農地等約700万ha）



Special Edition  
里山と暮らす

# 農を基盤にした暮らしの実践と普及を目指して。

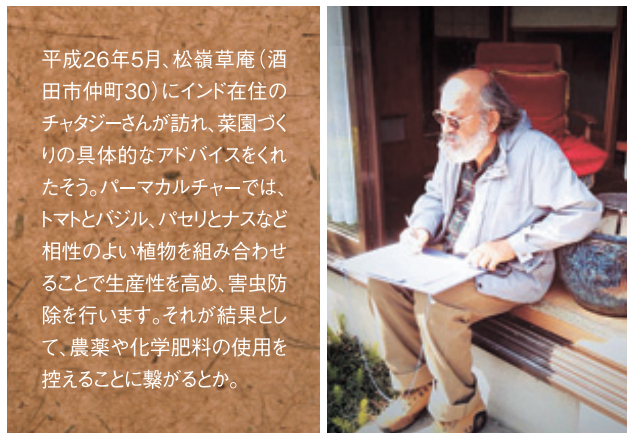
農的暮らし研究所  
小松広幸さん 馨さん

出羽丘陵の麓、酒田市松山地域の町中で「松嶺草庵」の看板を掲げながらパーマカルチャーを実践している2人がいます。「農的暮らし研究所」の小松広幸さん・馨さんご夫婦です。昭和62年にオーストラリアで提唱されたこの理論は、化石燃料に依存する暮らしを改め、太陽の恵みを生かしながら農をベースにした環境にやさし

い循環型社会を築くというもの。「人間も植物も、お互いに配慮し合う暮らしがパーマカルチャーなんだなって、最近よくわかってきました」と馨さんは話します。酒田の市街地で暮らす小松さんご夫婦が、現活動を行うきっかけとなったのは、平成19年、ふとした縁で同市平田地域の山元を訪れたことでした。「同じ酒田市とは

思えない」里山の風景に感動した2人は、それから毎週のように平田へ通うように。人々の温かさや生活文化を知るにつれ、人間本来の豊かな暮らしは里山にあると確信。借りた畑での収穫体験や里山ツアーなどのグリーンツーリズム事業を企画しながら、里山の魅力を発信してきました。

平成23年、東日本大震災を経てエネルギー問題を真剣に勉強するようになると、石油を大量に使う農業の方法に疑問を感じるように。藤村靖之著『月3万円ビジネス』からは、仕事と生活のあり方に大きな示唆を受けました。さらに翌年5月には、アジア諸国を巡って、環境保全型農業の開発事業を指導しているオルデンドウ・チャタジーさんが庄内を訪問。自然の力を活用して作物を育てるパーマカ



平成26年5月、松嶺草庵（酒田市仲町30）にインド在住のチャタジーさんが訪れ、菜園づくりの具体的なアドバイスをくれたそう。パーマカルチャーでは、トマトとバジル、パセリとナスなど相性のよい植物を組み合わせることで生産性を高め、害虫防除を行います。それが結果として、農薬や化学肥料の使用を控えることに繋がるのか。

ルチャーの畑づくりを教えてもらいました。こうして同春秋、「農的暮らし研究所」を発足。里山との縁を皮切りにさまざまな出会いと学びを深めた2人は、パーマカルチャーの考え方をベースにした新たな里山魅力発信活動をスタートしました。

現在はチャタジーさんにメールなどでアドバイスを受けながら、週に数回、松嶺草庵でパーマカルチャー菜園づくりに取り組んでい

ます。「土地や自然環境に合った野菜を、植物同士の相性を生かしながら育てる方法なので、あまり手が掛かりません。だから酒田の自宅から通いながらでもできるんです」。またそこで採れた野菜を活用した郷土料理の教室「一汁一菜の会」や自給エネルギーの大切さを伝えるミニソーラー発電ワークショップも開催しています。

広幸さんは話します。「今は食料もエネルギーも何でもお金で買

う時代です。でも日本だって50年ほど前までは畑を耕し、里山から薪を得るなどして自給していたわけです。昔に戻れとはいませんが、そうした部分に一人一人が少しでも目を向けていかなないと、現代のエネルギー問題や食糧問題、過疎化問題などを乗り越えるのは難しいだろうし、それらを解決していくのが、たぶん私たち世代の課題なんだと思います」。

里山と出会い、里山から大きなメッセージを受け取った小松さんご夫婦。2人は今日もまっすぐに今を見つめ、未来への種を撒いています。

パーマカルチャーに出会った時、まさに平田の里山で暮らすおじいちゃんたちの子どもの頃の暮らしだと思いました。

## Information

### こまつかおるの一汁一菜の会

毎月第2木曜日の午前中に、酒田市光ヶ丘にある松陵コミセン「太陽の家」(井山武司氏設計)にて開催。松嶺草庵で育てた野菜をメインに、シンプルながらも暮らしが豊かになる食卓作りを考えます。詳しい開催内容はFacebook「農的暮らし研究所」にて発信中。



Special Edition  
里山と暮らす

# 人と野生動物が ともに生きる道を 照らしたい。

イヌワシの森倶楽部  
高橋 誠さん

大きな羽を広げ、上空を悠々と飛翔するイヌワシ。しかし現在、日本における生息数は500羽以下といわれ、絶滅の危機にさらされています。全国に200ペアいるイヌワシのうち、山形県に生息しているのは20ペア。鳥海山麓でも姿が確認されています。

酒田市八幡地区を拠点に、それら野生動物の調査・保全活動を行っている高橋誠さんは、「イヌワシの森倶楽部」の代表です。「イヌワシは肉食の強い鳥というイメージがありますが、実はとてもデリケートな動物です。食物連鎖の頂点に立つイヌワシは、生態系を



## 生態系の状態を反映するイヌワシの調査・保全は、 その森に暮らす生き物全体の保全につながります。

シは、人間と共存してきた里山の鳥なのです」と高橋さん。しかし、時代の変化とともに人が森林に入らなくなり、さらに戦後、杉が大量に植林された後、外国産木材の輸入に圧されて国内林業が低迷した結果、多くの森林が放置され、日光が入らず生き物が活動しにくい環境になりました。「反対に庄内の海岸林のように、人々が畑を作り、きちんと手入れをしている里山は、樹間もほどよく空き、小鳥などの小動物が集まるため、オ

オタカなどが繁殖しています。その意味で、海岸林も里山だといえるのです」。

現在、高橋さんは人と野生動物が共存できる里山を作ろうと、全国各地でさまざまな活動を行っています。イヌワシの専門家として企業CSRの立ち上げにも協力し、楽天株式会社「楽天の森プロジェクト」に参画。東北に生息するイヌワシの保全を推進しています。さらに、年間を通して自然体験会「やまからうみネイチュアファイ

リング」を開催し、自然に親しむ機会が少なくなっている子どもたちが、楽しみながら自然や動物の生態を学べるイベントを企画しています。「庄内は、西を海岸林、

東を出羽丘陵に囲まれている自然豊かな土地です。庄内の暮らしは、いわば里山というゆりかごの中で、野生動物と一緒に生活しているようなものです。僕たち人間の身近にある自然と野生動物を理解し、ずっと共生していけたらいいですね」と高橋さん。生活が便利になり、自然を忘れ、疎かにしがちな昨今。ゆりかごのように命を包みこむ庄内の里山に、今一度目を向けてみませんか。



Special Edition  
里山と暮らす

形成するそれぞれの植物や昆虫、動物が適切なバランスを保っていないと生息できません。ですから、イヌワシはその森の生態系が正常に保たれているかを測るバロメーターにもなります」と高橋さん。鳥海山麓にある環境省の猛禽類保護センターで働いていた経歴を持ち、日本イヌワシ研究会理事として活躍する高橋さんは、庄内だけでなく、全国的にイヌワシの調査・研究に携わっています。

また、イヌワシは標高の高い山奥にすむ鳥だと思われがちですが、営巣地の近くには、炭焼き窯など人間の活動の痕跡がよく見つかります。かつて里山は人間の手が入り、森林をうまく活用していたため、動植物が育ちやすく健全な生態系が保たれていました。「その環境の中でこそ生息できるイヌワシ

### Information



### イヌワシの森倶楽部

季節ごとに自然体験・観察イベントを実施。森林探検や生き物採集、イヌワシとの触れ合いなどを通して、楽しみながら自然や野生動物との共生を考えます。近日開催のイベントは9月13日(土)の「コウモリを楽しむ観察会」。詳細はブログ「やまからうみ」へ。



(上)平成25年に山形県で唯一巣立ったイヌワシの幼鳥。(左)山形県最上地方や秋田県で保全活動が実施されているクマタカ。(中)雪深いフィールドで調査を行う高橋さん。(下)8月初旬に開催した「鳥海山麓八森こども自然学校」の活動風景。荒瀬川の遊水広場で在来魚の観察や川遊びを行いました。



# 山とともに暮らす知恵を、次世代へ繋ぐ。

## まき 三瀬の薪研究会

日本海に面し、三方を山に囲まれた景観が美しい鶴岡市三瀬地区。1600人ほどが暮らすこの地で今、住民らによる森林活用の取り組みが始まっています。

平成25年12月に発足した「三瀬の薪研究会」。「奥山の杉林の間伐を行うためには、その手前の里山に広がる広葉樹を伐採して道路をつくる必要があります。伐採した

広葉樹をむだにせず、薪にしてはどうかという話になって」と研究会発足の経緯を教えてくださいました。

のは、会長の鈴木正さん。同地区の林業士、加藤周一さんから「伐採した木材を平場まで運び出す作業は自分たちが担うから、薪づくりの作業を任せたい」との提案を受けた鈴木さんは、「1年目は採算度外視、データ収集になるけれど、と定年を迎えた地域の先輩方に声をかけたら、快く賛同してくれての」。当初9名で始まった研究会は現在13名に増え、配達や販路開拓にも力を入れています。震災後は資源エネルギーへの価値観の変化もあり、薪の需要は増えつつあるようです。

長い間、三瀬の人々の暮らしを支えてきたのは、地域を囲む山々の恵み。適度な風が吹き、雪害も湿度も少ない気候風土で育まれる硬くてしまりのある「三瀬杉」は、まさに住宅建材に最適なのだとか。「山をきちんと手入れすることで良質な杉はもちろん、孟宗竹、蕨やミズなどの美味しい山菜が育まれ、伐採した広葉樹は薪として暮らしの糧になる。昔は、杉の不要な部分を使って杉下駄を作る商売も盛んだったなやの」と鈴木さん。しかし、昭和50年代には割安な



**地域資源を、地域の人々が携わり、循環させていく。それが、地域の未来へとつながっていくはずだ。**

の記念植樹を開催。「子どもたちは興味津々でも喜んでくれて。いつか、あの時みんな植えた木だねと自分たちの成長と重ね合わせてもらえればの」。山に入る経験もなく育った世代にこそ、山に、そして森に親しんでほしいと話す加藤さん。「地域の人々がアイデアを出し合うことで、三瀬の可能性はまだまだ広がると思います」。

文〓土門かおり



(右上下)研究会メンバーは山を良く知る先輩方。若い頃の経験を活かした雇用の場でもある。(中上)林業士の加藤周一さんは㈱佐藤工務で、地産材を活用する山づくり、人づくりを実践。(左上)美しく手入れされた「ひやくねん森」は、多様な生命が息づく理想の環境。(左下)三瀬保育園の子どもたちが植林のお手伝い。健やかな成長は大人たちの願い。20年で20mほどに育つそう。



然と集まり、自由に意見を交わせる環境が整い始めた三瀬地区は、今年秋の「東北新サミット」開催地にも決定し、県内外からますます注目が集まりそうです。

「地域にある資源を地域の人が携わり、地域の中で循環させることで活性化。それが一番の理想」と話す加藤さんが力を入れてるのは人材の育成。株式会社佐藤工務の林業アドバイザーとして後進に指導する傍ら、会社の後押しもあり、三瀬の山全体の整備に着手、木材の活用策も積極的に提案しています。今年の春には、伐採後の森林跡地で保育園の園児を招いての植林体験や、小学校閉校

### Information

#### 三瀬の薪販売

薪は広葉樹ミックスと間伐杉材の2種(いずれも長さ35cm)で、ケースまたは棚で購入できます。また、一部近隣地域へは無料配達も可。  
[参考価格] 間伐杉材1ケース600円、広葉樹ミックス1ケース800円  
申込・問●鈴木正(すずきオート商会内) ☎0235-73-2378





庄内写真季行 20 鶴岡市・関川

風もないのにトチの実が  
ボダッ、ボダッと落下する9月中旬。  
村人たちがトチの実拾いにやってくる。

初夏、気温が上昇するとブナ林でトチの花が一斉に咲く。花は甘い匂いを放ち、花粉を求める虫の羽音が森中に響き渡る。受粉した花は青い実をつけ、9月中旬頃には落下し始める。すると山里の人々は誘いあってトチの実拾い

にやってくる。拾った実は水につけて虫殺し、天日干しをして保存する。そのままでは渋みと苦味があるためアク抜きをする。そしてできるトチもちは、固くなりにくくカビも生えないため、山仕事やクマ狩りに持ち歩いた。





## 刺し勇の庄内刺し子

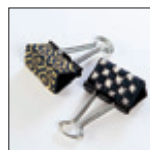
手仕事を愛する女性たちがメインの「庄内刺し子」の世界になにやら異彩を放つ刺し子を発見  
作り手は、なんと1974年生まれの男子だった

紺のスニーカーに施された「栞刺し」と「柿の花刺し」。これは、布地に模様を刺し、専門の靴屋でスニーカーに仕立ててもらった特注品。30代半ばで庄内刺し子と出会ってほれ込み、「めんごいなあ」と作り続けている「刺し勇」。こと小野寺勇一さんの庄内刺し子だ。

江戸時代、防虫効果の高い藍染の作業着に白い糸を縫うことで、衣服を補強し、寒さを防いだという刺し子。農民の暮らしから生まれたこの知恵は現在、地域の伝統芸として全国各地で受け継がれている。特に、津軽のこぎん刺し、南部の菱刺しと並んで「日本三大刺し子」と称される庄内刺し子には、他には見られない曲線的なものや緻密で美しい文様が数多くある。それは、木綿が育たず目の粗い麻布を身につけていた東北地方の中で、北前船交易で栄えた庄内には木綿の古布が流通し、それに加えて庄内の人々が、自然や農作物の造形美をみごと文様に映し出したからだ。

難易度の高い庄内刺し子を刺すたびに、そんな先人たちの観察力や表現力に心から脱帽するとう刺し勇さん。「閉ざされた冬の晴れ間、遠くの山を眺めて杉刺しをして、やがて訪れる春を思いながら花刺しをする。昔の人たちはそうやって刺し子を愛でながら、家族への繕い物をつくっていたんだと思います。僕は、この刺し子文化を後世に伝える流れの一部になりたいですね」。

生地の下絵を描いて刺したら、指が痛くなるほど糸こきをくり返し、製品に仕立てていく。一人の男性が生み出す、めんごくてカッコいい庄内刺し子は、人々に笑顔の花を咲かせている。



鶴岡市在住の刺し勇さんの師匠は、庄内町在住の佐藤恵美さん。他にも庄内刺し子は「遊佐刺し子」や「平田さしこの会」を筆頭にさまざまな人に愛され、教室も開催されている。刺し勇さんは普段作りためた作品を、休日に地域内外のイベントなどでPR販売中。写真のシューズは残念ながら非売品。

刺し勇 ☎090-9424-4528(平日のみ17:00~21:00)

# 秋空へ羽ばたく 浅葱色の妖精

季節の変わり目は、空を見るのが面白くなって何度も見上げてしまう。秋の空は一時たりとも同じ表情を見せることはなく、想像を超えたドラマがある。その空へ吸い込まれるように、消えゆく浅葱色の妖精を見つけた。



ヨツバヒヨドリに吸蜜するアサギマダラ

に空を見上げている。その先に、まるで刷毛で描いたような雲が広がる。野原を渡る気ままな風を見ていると、風が秋を連れてくるのではなく、スキの刷毛に塗られて、風が秋色に染まっていくのだろうと思わずにはいられない。



大台野のすすき野原

山暮れて野は黄昏の薄かな  
― 蕪村  
鳥海山湯の台から新山を間近に望みながら大台野を歩く。そこは一面、金色に輝くスキ野原。スキは囁き合うように風と戯れ、天に手を伸ばすように一斉

毒化するといわれている。

ヨツバヒヨドリの群落で夏を過ごしたアサギマダラの群れは、9月になると南西に向けて「渡り」を始める。無事に南へ着くようにと願わずにはいられない。

鳥海山を越えゆく秋の渡り蝶  
― あべ小萩

アサギマダラを見送り、さらに歩を進めると、みるみる雲が降りてきて一面霧に包まれた。秋の空は変わりやすいというが、まさにその瞬間をみる。優しかった風は一変して力強くなる。



のぞきから臨む鶴間池

とぶものはみな羽ひびく秋の蝶  
― 山口響子  
風を感じてさらに歩くと、道の両脇にチヨウセンシオンやヨツバヒヨドリが咲いている。ヨツバヒヨドリを見つけると、アサギマダラに会えるかもしれないと心が躍る。初めてアサギマダラを目にした時、その翅の浅葱色の美しさ、ひらひらと優雅な舞姿に見入った。後になってこの蝶が、春には南西諸島から本州へと北上し、秋には南西諸島を目指して南下する、1000キロから2000キロの距離を飛ぶ「渡り蝶」だと知り、ますますその魅力に取り込まれてしまった。  
アサギマダラは優雅に飛ぶだけではなく、人の手に触れても逃げない。じつは毒蝶としても有名で、天敵である鳥も、この蝶には手を出さない。アサギマダラが幼虫の時に食する植物に毒性のアルカロイドが含まれ、それを取り込むことで

その先の「のぞき」に着く頃には、霧は過ぎ去り、微かに色づき始めた山々の底にひっそりと佇む鶴間池を見ることができた。鶴間池の水面に秋の雲が映る。ここからは、遥か月山や庄内平野、そして日本海をも臨む。庄内に暮らす人たちの豊かな自然、その恵の源を目の当たりにできる場所である。

みちのくの山粧へば水もまた

― あべ小萩

アサギマダラの姿が見えなくなり、秋の花が咲き終わると、鳥海山には竜田姫が降りてくる。またやってくる冬を前に、錦秋に山装う季節をじっくりと楽しみたいものである。



紅葉の始まった鳥海山



チヨウセンシオン